

NEW YORK 5週間 ぶっつけ本番一人旅

平成 22 年 9 月 10 日投稿

会員投稿：大島 キヨ子

出発まで

思い立ったが吉日とばかり、成田から NY の JFK 空港へ飛び立ったのが 5 月 6 日、貴重品は身に着けて、必需品をショルダーバックに、滞在中の必需品は中型のスーツケースとサブバッグに、これが 5 週間分の荷物だった。

飛行機の搭乗券と座席を始めてネット予約。予約のつもりが、早とちりしてクレジットカード番号を入力してしまい、「購入」になってしまった。さあ大変！！高額のカンセル料が発生することになった。この時からキャンセルも視野に入れての葛藤が出発直前まで続いた。以前から意識的に NY が舞台のドラマを見たりブログを読んだりしていたものの、いざ決行となると決断は重かった。

英会話を勉強中なので、英語圏で一人で行動してみたいという願望はあった。私の場合は究極の目的でもあった。5 年前、カナダで 2 回のホームステイを経験しているので、日本語なしの生活には免疫があった。あの時は一月があつという間に過ぎた。いつかまた、もっと長く、という未練が残っていた。

そんな時、昨年 4 月、NY 3 泊 5 日のメールに接して NY へ行くことを決断。鶏インフルエンザ発生直前に帰国していて幸運だった。あの時は登山用のリュックを担いで有名ホテルに宿泊、現地の日本観光会社からミュージカルチケットを買い市内観光をした。しかし朝寝坊をしてしまい絶対に時間が足りなかった。次回を期して、地下鉄のルートマップを保存し、ドルも清算せずに残しておいた。

旅のスタイル

- * 英語圏で英会話を試したい。
- * 儉約思考で欲張り旅行を楽しむ。
- * 携帯とパソコンを持参せず、公共の図書館で旅行者用の無料 PC を使う。
- * Hostel を利用して長期滞在を楽しむ。
- * 観光より人との交流を楽しむ。
- * 自由に気ままに行動を楽しむ。
- * 「百聞は一見に如かず」を実感する。

* 「郷に入っては郷に従え」を実践する。

* 「求めよさらば与えられん」を試す。

以上のテーマと言うかスピリットを大まかに決めて、とりあえず NY 初日から 1 1 泊の Hostel を日本で予約した。その先は全くの未定だった。何処に泊まって、何をして、何処へ行くのか、現地で決めることにした。しかし外国で冒険的挑戦をするには絶対必要条件がある。1 に体力、2 に気力、3 に適応力、4 に会話力 と考えている私は、現時点の体力が限界かもしれないと感じ始めていた。

ユースホステル



NY のホステルでは世界各国の大学生と同じ部屋で料理をしたり食べたり、話したり、日本では体験できないことを楽しんだ。私は朝夕の食後にお茶を持ってシアタールームに入り、巨大スクリーンで CNN ニュースを見るのが好きだった。

ホステル利用者には私のような年配者をかなり見かけた。補助車を必要とする半身不随のイギリス女性、巨体過ぎて歩行器が必要なアメリカ女性、腰の曲がった高齢の男性、妊娠中の若いカップル、6歳女兒と10歳男児を連れたフランス人家族、早朝の列車に乗るためのつなぎ宿泊、NYの大学に留学するための慣らし宿泊など、利用者は実に千差万別だった。中国人男性は勉強道具を持ち込んで周囲に溶け込めない様子だった。若い日本人カップルはカナダ在住だった。この日本人カップルは女性所有のPCを私に預けて観光に出かけた。私は日本語で長文のメールを家族へ送った。時間を気にしないで、辞書を使わないで、自分の家族へ、異国での近況を報告する喜びを実感した。私は彼らに必需品のプラスチックの保存容器とカップ、折りたたみ傘(メキシコ女子大生2人のプレゼント)をプレゼントした。

私はボストンの Hostel から来ていた韓国人学生に街の様子を聞いて地図と魔除けのペンダントを貰った。すると潜在願望が頭をもたげてきて、結果として12泊目から4泊5日のボストン行きを実現させた。

図書館



NY 二日目、早速、徒歩圏内の図書館へ行き、受付で暗証番号を貰って指定された PC の前に座る。見たことのない機種、全て英語説明、使用時間は各図書館によって違うが45分から15分、秒単位のカウントダウンが気障りになって始めは何も手につかなかった。スタッフに教えてもらい家族にメール送信が成功した時はうれしかった。翌日は写真も添付した。日本語不可のパソコンなので、英語とローマ字で近況

を知らせるしかない。家族からも英語混じりのローマ字メールが届いた。ローマ字に感謝！空港で知り合った NY 在住の日本人へもメールをしてみる。Hostel の PC は有料なので利用者は少ない。私は PC 操作が苦手。1 ドル札を山ほど積んでも足りないだろう。だから、私はぶらぶらと歩いて散策がてら図書館へ出かけた。

だが図書館は利用者が並ぶと時間に厳しくなって、連続使用が出来なくなった。別の方法を考えなければと、思いついたのが大学の図書館。幸い私の Hostel はセントラルパークやコロンビア大学へ歩ける距離にあった。地図を頼りに人に聞きながら大学構内へ辿り着くと、そこには見学者や学生がいた。手入れの行き届いた広い構内や施設が一般に開放されていた。卒業式後の親族は自慢げに我が子を紹介してくれた。私は可能な限り足を踏み入れて見たり聞いたりして、2 箇所にある PC ルームを突き止めた。

まずボストン Hostel の予約状況と移動手段を調べ、場所をネット上の地図で確認して、その上で希望の日程を予約する。これは時間との競争だった。時は学校の夏休み直前。世界中から NY やボストンへ押し寄せる若者たち。どうにか4連泊の予約が出来て幸運だった。次に移動手段は NY、ボストン間を4時間15分で結ぶ高速バスを予約した。



続いてボストン後の Hostel を検索すると満室ばかりで慌てた。格安ホテルもどんどん予約済みになっていく。かろうじてハーレム入り口地区にある Hostel を見つけた。セントラルパークやコロンビア大学へも歩ける距離だったし、地下鉄やバス STOP に近かった。NY の地下鉄は1週間券が27ドル、バスにも使えるのでとても便利だった。ドラマで有名になった図書館へ行ったら順番待ちで、理由を聞くと、回線が故障との事。名前を消して重厚な造りの館内を見学してから街に出た。



ボストン3日目、朝から雨。私は図書館へ歩いて行く事にする。地下鉄を使うほどの距離ではなかった。この待ち時間は15分だった。スイッチ ON でカウントダウンが始まり、情け容赦なく全てが消えた。しかも待ち人の列が気になる。短いメールをするのがせいぜいだった。NY へ戻ってから後の観光を検索したり、色々考えて予約するには時間が掛かる。そうだ、大学へ行こう。

翌日、私は迷わず名前に馴染みがある MIT へ向かった。途中から地上を走る地下鉄で趣のある街並みを楽しみながら終点で降りると目の前が大学の構内だった。散策後に PC の前に立つが、操作に手間取っている間に、予定していたナイアガラ観光の日取りが売れてしまった。諦めることも考えたがホワイトハウスは見たかった。ナイアガラフォールの飛沫も浴びたかった。思案に暮れていると大学事務局の責任者が自分の PC で自らが窓口になって、電話確認をして私の希望を叶えてくれた。私は持っていた日本の菓子類を全て彼に与えて写真に納まった。その後、彼からはメールも来た。

再度訪問のコロンビア大では音楽史の女性教授が私を部屋に入れて、彼女の PC でバスツアーの関連書類をプリントしてくれた。集合場所の地図は拡大してくれた。書類一式を大学の封筒に入れてくれた。若くて美しい人だった。なぜか、私のバスツアーはボストン大学とコロンビア大学の協力の賜物とも言える。そんな気にさせてくれる二つの大学である。

おかしな話だが、PC を持たない私が、PC の必要に迫られて NY の図書館を探して歩いた。地下鉄に乗り、バスに乗り、美術館へ入ったり、公園で居眠りしたり、買い物したり、足の向くまま気の向くまま、移動先でも観光のない日は PC を求めて動いた。結果として、一般の旅人が行かないような図書館や大学へ行く事になった。ついでに図書を見たり、休憩したり、自動貸出機に触れてみたり、展示物を案内されたり、観光コースにはない場所に足を運んだ。人との接点は実に多彩だった。だが残念なことに、私の貧弱な英語力では折角のチャンスも平坦に終わった。もっと食い込んで話せる知識と英会話力が欲しかった。

コンピュータ

世界一の PC 普及率国といわれるアメリカ、各図書館は規模に応じて PC デスクを備えていた。大きな図書館は市民用と旅行者用の部屋を別にしていて、整然と並ぶ PC の数は圧巻だった。彼らは図書で調べ物しながら PC を使い、新聞を読んでから PC へ向かったりしていた。幼児は母親と一緒に操作の練習をしていた。小学生は母親の隣の PC でゲームに興じていた。

ところで、日本で自分の PC を持ち込んで気兼ねなく使用できる公共のスペースはあるだろうか。空港ロビーは一般化されているが、地区センターやプラザなどでは見かけない。

公園には余るほどの椅子やベンチが並んでいる。当然ゴミ箱もある。テーブル席は飲食をする人と PC を使う人が占める。両方を同時にする人も多い。老若男女がノート型パソコンを開いて真剣にキーボードを見つめる。中には映画を見ている人もいる。さすがに地下鉄やバスの中では携帯メールやスマートホンが優先していた。

Hostel ではコンセントが足りずに蛸足配線だった。ホステラーにとって自分の PC は必需品なのだ。彼らは宿泊中に生情報を得ると次の目的地へ向かう。だから Hostel のロビーや食堂は朝夕にワイヤーが床を這っているのに要注意だ。TV を消してパソコン電話で笑い転げるイタリア女性 2 人、女性の名を連呼する南米の男性など、実に賑やかである。

NY の日本人

NY 在住の年配者は関西弁を喋る混血幼児を連れていた。共働きの娘宅で子守をしているという。私たちは年齢も近いことから互いに心が通じた。彼女は私を高級住宅地のマンションに招待し友人を紹介してくれた。そしてバスツアー出発前の二泊を提供してくれ、日本料理でもてなしてくれた。いざ出発日、早朝の出発に備え 2 食分のお弁当と飲み物と果物まで用意してくれた。私は梅干や鮭のおにぎりを食べながら胸が詰まった。

サンドイッチの中身には火を通してあった。家族同様に食べ物に気を遣ってくれた彼女の誠意を忘れることは出来ない。また彼女は私を孫の4歳(彼は私になつた)の誕生日に招待してくれた。そこでもまた多くのNY在住の日本人家族に会うことが出来た。今もメールや手紙が往復している。彼女はNYの親友になった。

バスツアーから帰ると、私は紹介されたブルックリンに住む日本人宅に向かった。帰国までの7泊を間借りすることになったので一安心だった。Hostel並みの料金で借りることが出来た。マーケットで買った食材を料理した。PC付個室が気に入った。朝夕の日本語挨拶も懐かしかった。二人で食事をしたり、散歩に出かけたりした。

帰国

今回の“ぶっつけ本番一人旅”は身体的に何ら不快を感じず、精神的にも異文化、異年齢集団とのコミュニケーションが苦にならない自分を再発見した旅だったように思う。人に出会い、人に助けられ、人と楽しみ、人に感謝する5週間だった。その場、その時に、自然体でぶつかっただけだが、結果としてはLucky & Happyだった。

次にNYへ行く時は事前準備をして、事前に間借りを予約して、日本語のパソコンを持って、お洒落をして、・・・などと考えている。

空港待合室で京都旅行をするNYの学生グループと歓談した。私がHostelでの様子を話すと、「Oh, that's great!」と言った

帰りの機内で、5週間ぶりに飲んだビールは、最高でした！